女性文化の創造へ

渥美育子略歴
女性誌『フェミニスト』編集長
青山学院大学助教授
昭和15年，名古屋生まれ，青山学院大学英米文学科卒業後，カナダのブリティッシュ・コロンビア大学　創作科，米アイオワ大学国際創作科に留学，昨夏，女性のためのメディア『フェミニスト』(隔月誌) を創刊。
著書は『ザ・バーニング・ハート』など英文のものが多い。詩人。結婚して一児の母。

女性文化の創造へ

1978年10月20日　初版発行
1978年12月 1 日　再版発行

著　者　渥美育子
発行者　酒井杏之助
整版所　有限会社西田整版
印刷所　相馬印刷株式会社

発行所　ELEC 出版部(財団法人　英語教育協議会)
東京都千代田区神田神保町 3 の 8 (〒101)
電話 (03) 265-8911　振替　東京 3-11798

関山製本　0036-780112-0613

女性文化の創造へ

渥 美 育 子

ＥＬＥＣ 出版部

目次

女性文化のふくらみを！

第Ⅰ章　エリカ・ジョングとの対話

1　一回目……15
『飛ぶのが怖い』の大成功のあと／諷刺とエロティックな女の詩／人間性回復運動と女性たち／ニューヨークのアパートで、あるいは女性の時代の到来

2　二回目……39
『飛ぶのが怖い』を書いた動機は？／わたしは読者との間にかきねをもうけない／自分の中で十九世紀と二十一世紀の女が戦っている／女性は近視眼的な発想を破らなくては……／『トータル・ウーマン』？　本としてはとるにたらないものよ／対等で、できるだけ多くのことを共有できる関係／恐れ克服のため精神分析医にも通った

3　三回目……60
女性作家を定義するもの／今は、女性の世界的な転換期／新しいタイプの女性と創造性／わたし自身、熱心なフェミニスト／前衛に立つ、女性作家の立場／ルーツは女性意識に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第Ⅱ章　女性文化の時代へ

1　個我をもつヒロインたちの出現
——女性的原理の追求
(1)　トータルな自己の創造……79
(2)　女の空間の陣どり……84
(3)　女の遺産の確認（正当性ということ）……89
(4)　新しい女性像の探求……95
2　〝血〟と女性の創造行為
——仏教的土壌から陽気な子宮的宇宙観へ
(1)……101
(2)……107
(3)……115
3　父性の権威否定としての女性意識
——〝ヒーロー〟から〝ウーマン・ヒーロー〟へ
(1)　権力的ヒロイズムからの脱出……123
(2)　男性英雄像の変質……130
4　〝職業婦人〟から〝キャリア・ウーマン〟へ
(1)　〝キャリア〟と〝飛ぶ〟イメージ……141
(2)　〝職業婦人〟とパトリズム……142

(3) 戦後のマトリズム化……143
(4) 産業側の変化……145
(5) "自立"を評価する時代……146
(6) 求められる一貫したアイデンティティ……149

第Ⅲ章　女性存在の原型を求めて

1　アメリカの女性詩人たち
(1) 女であることの再定義……155
(2) 政治と直結、新しい神話つくり……167
(3) ユーモアと陽気さと諷刺と……186
(4) 怒り……189
(5) 男も女も強い意志を……192
2　アメリカの生活と女性たち
(1) 女性意識のつよいめざめ……196
(2) 男性標準の意識から脱出……201
3　アメリカで花盛りの女性学
(1) 新しい文化創造への手がかりとして……205
(2) ほんとうの女性学とは？……208
4　シルヴィアの国から

(1) 女の芸術家であること……211
(2) 『飛ぶのが怖い』――これはひとりの女の精神と性の放浪の物語……222
5 政治の男性神話打破……227
初出一覧……230
あとがき……233

女性文化のふくらみを！

長い歴史のなかで、女性という存在が今ほど注目され、真剣に研究されようとし、社会的な力をもって動きはじめたことがあっただろうか。

ここ一、二年の日本の動きをみても、女であることの根を地道に掘り起こすためにいくつかの女性史・女性問題研究会が結成され、一部の大学では教師指導のかたちではあるがすでに女性学の講座がおかれ、国際的な視野で日本の女性を考えようとする学会も組織された。また、国立大学で男子学生が今まで目にもとめなかった大衆のなかの女たちの精神史に興味を示し、毎日の新聞にも女性関係の記事がふえ、翻訳、書きおろしを問わず出される単行本、雑誌の女性特集は、みるみるうちに私の机のうえに積みあがっていく。

しかし、こういう〈女性解禁〉のなだれのような出発点に現在たっているからこそ、私たちは原理的なところにたち返って、正しい方向を確認する必要があるだろう。さもないと、私たち自身、情報のなかで自分を見失い、窒息してしまう。

数年前のこと――七五年の秋から七六年の春にかけて――、私はアメリカ大陸を、サンフラ

ンシスコからボストンへ、シカゴからニューオリンズへ、あるいはロサンゼルスから帰国の途へと飛行機を乗りついでいた。そして、時には雲につつまれ、時には緑色のキルト地のようにみえる眼下の景色をながめながら、地球上には女と男しかいないのに、なぜ女性による新しい運動がその核にある大切なものをふくらませ、すべての女性が望むものを創りだす方向にいきにくいのだろうと考えていた。ここでいう〝運動〟とは、すでに在る文化を絶対視しないで、もし私たちに不都合なら私たち自身で新しい文化を創りだしていこうという動きを幅広くふくめて言っている。つまり、資本主義社会において起こるべくして起こってきた女性解放運動が一部の女性による尖鋭な意識変革と権利獲得運動から、多くの女性による文化の創造へと向かう転換の契機について考えていたのである。

日本では、七〇年代の初めにアメリカの急進的な女性運動の〝行動(アクション)〟の部分が〝リブ〟として移入され、男性の感覚が支配的なマスコミを通して偏ったイメージを一般の人びとに定着してしまった。すでに男女平等の世のなかなのに、さらに女権の拡張を一方的にかん高く主張する戦闘的な女の集団というのがその中味である。その後も人目をひくにぎやかな〝行動(アクション)〟が先行し、〝リブ〟は日本の土壌にあわないものとして異端視されてきた。今でも〝リブ〟であるのは、女として魅力的でかわいいのと両立しえないと思われ、若い女性が真剣に将来を考えようとする時「わたしはリブではないが……」と前おきしなければならないのは残念である。私の最大の関心は、〝リブ〟が負ったマイナスのイメージによってみえなかった文化的すそ野を洗

いだし、もっと広い統一を与える方向にいくにはどうしたらよいか、目ざめた一部の女性の〝行動（アクション）〟をどうしたら万葉時代から延々と続いてきた日本女性の創造行為に結びつけることができるか、ということであった。もっと私的な表現をすれば、権利の獲得を焦点におくよりも、どのようにしたら私が女としてのユニークな核を失わないで、自由選択によって何かを生みだしていくことができるかという根本的な問題である。

私は長い間、アウトサイダーに興味をもっていた。歴史の網目からこぼれ落ちた存在について書き、そういう人を愛さないではいられなかった。それが、文化の担い手という点では女性全体がアウトサイダーなのだという自覚にはっきり結びついたのは、七五年の夏にアメリカの詩人ケネス・レックスロスと日本の女性詩人のアンソロジーを編む仕事をひきうけたのをきっかけにしている。その年ちょうど秋からの四カ月を、米国務省の招きでアイオワ大学の国際創作科ですごすことになったので、ボストンバック一パイに額田王や坂上郎女、与謝野晶子から戦後詩人にいたる資料をつめこんで飛行機に乗りこんだ。そしてアメリカ中西部の、時間がこおったような白い空間のなかで、今まで敗戦のところでポツンと切れていた十二世紀にわたる日本の女たちの切々とした肉声を聞いて、日本の社会において女性がどれほど無視され、疎外されてきたかを実感することになった。

第二のきっかけは、そのあと個人的なプログラムとして、七六年の春にアメリカの文化の最先端のところで活躍している二十数人の女性芸術家たちに会い、いっしょに仕事をしたり語り

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あったりした体験である。彼女たちは〝飛んでいる女〟のなまなましいライフスタイルで解放運動を根のところで支えながら、それを超える地点に向かって創造行為を広げていた。各地をとびまわってインタビューするうちに、私の視野は五千年の父権制社会をさかのぼり、太平洋をわたってアジアにまで広がって、私は女性文化の重要さにもっと早く気づかなかったことを後悔したほどだった。

さらに同じ年の秋に、ハワイの東西センターで開かれた「文化の収斂現象」に関する会議に出席したあと、本土を講演してまわった。七七年の春にも再度アメリカに行ったが、それら数回にわたる旅は、私の女性意識の原点へと降りてゆく過程であるとともに、〝リブ〟からもっと広汎な文化運動を包みこむ〝フェミニズム〟への旅でもあった。現在女性の学者や芸術家たちを研究や創造行為にかりたてるエネルギーになっているのは、フェミニズム的な哲学であるといえる。ウィメンズ・リバレーションと呼ばれ、数年にわたってわが国で拒絶反応をひきおこしてきた運動は、じつのところ歴史上の文化全体に一層のふくらみを求める胎動であったことが、明らかになったのである。

今、私は反抗的な運動から文化の創造への転換を、正当性の獲得と、女性の空間の陣どりの二つの角度から考えている。前者は女性についてつくりあげられた古い神話を脱ぎすてて、女が世界のヒロインとして自由に生きられる新しい神話、つまり女性の価値体系をつくることと密接なつながりがあるし、後者は物理的な空間と同時に女性の空想や想像力による宇宙空間の

確保をも意味している。

いずれにせよ、女性の知的な力（パワー）によって、女の手で生みだされる文化は、これまで男性が中心になって築いてきた文化のもつ破壊性、排他性、階級性、硬着性を緩和し、対立した要素を包みこみ、交感しあい、まるみと柔軟さをもって共存していくものになるだろう。少くともまず、タテ型依存社会に女どうし横のつながりを織りこむことによって、新鮮な風を吹きこむことになるにちがいない。女性の視点がはっきり出てくれば、男性もまた被写体となり、自分をみる複眼を得ることになるし、それとともに女性側からさし出される女であることの未知の広大な空間を発見するはずである。

歴史への女性の遅ればせの参加は、力による上下関係を地ならししてゆく歴史の流れの必然的な方向であるばかりでなく、人類の危機をさけるほとんど本能的な願いに裏うちされているのだと、私は信じたい。

I

エリカ・ジョングとの対話

一回目

一九七六年九月十五日
ニューヨーク七十四番街にある彼女の高級アパートで。

アイオワ大学の国際創作科に招かれて、世界各国の作家たちと四か月をすごしたのをきっかけに、かねてから興味をもっていた〈前衛にたつアメリカの女性詩人たち〉に会って仕事や文化の方向について語りあうという、個人的なプログラムを実行した。まず、最もすぐれた仕事をしている二十余人を選び、五大湖周辺大学の招きで講演や朗読旅行をしながら資金をつくり、七六年の春に集中的にインタビュー。エリカ・ジョングはそのうちの一人だが、ニューヨークですれちがい、彼女がくることになっていたロサンゼルスで私は講演をしながら待っていたが、会えなかった。

夏にハワイの東西センターで開かれた国際会議に出席した帰り、ニューヨークのジャパン・ソサィァティで話をして再びアイオワに飛ぼうという前々日。やっとテレフォン・アンサリング・サービスのあいまをぬってジョングをつかまえる。半自伝的小説『飛ぶのが怖い』(七三)でベストセラー作家になってから、必死でプライバシーを守ろうとする彼女と、その壁をなんとか破ろうとする者の戦い、一時終了。

エリカ・ジョング(Erica Jong)は一九四二年三月ニューヨーク市生れのユダヤ系詩人、小説家、エッセイスト。バーナード・カレッジ、コロンビア大学大学院、同大学の創作科を出たあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com